◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第41回 つながる建物保存の願い

Residence of Prince Asaka 1933—

旧朝香宮邸は戦後、吉田茂首相公邸（昭和23–29年）、白金迎賓館（昭和30–49年）、白金プリンス迎賓館（昭和50–56年）と様々に用途を変えながら今日に至っています。激動の時代を経てなお、ほぼ完全な状態で建物を公開できるのは、この建物の維持管理に携わった人々の並々ならぬ苦労の賜物といえるでしょう。その一人、白金迎賓館館長中田虎一氏は、朝香宮邸時代からこの館で執務をとり、朝香宮家が去った後もこの建物を見守り続けた人物です。

昭和36年、中田氏は旧朝香宮邸の文化財指定を請願する文書を東京都教育委員会あてに書いています。*1 そこには朝香宮邸建設の経緯から、建物の特徴、戦中、戦後の様子まで、この建物の波乱万丈を永く見守った者でなければ記すことのできない、たくさんのエピソードが盛り込まれていました。ここでは知られざる戦時中の様子を記した一文を紹介します。

図2,3

「昭和8年に竣工してから約30年、［中略］この間の維持管理には多くの人の涙ぐましい努力がかくされています。とりわけ太平洋戦争の末期、米機による空襲の激しかった頃や、敗戦後進駐軍に接収されそうになった時の苦心は並々ならぬものがありました。空襲の激しかった頃、本館には陸、海軍並びに警察、消防より毎日一個小隊が派遣され本館の警備にあたっていましたが、この人たちの献身的な努力によって焼失を免れることができたのであります。…」文書全体には、建築に対する深い理解と愛情が貫かれており、朝香宮邸を永久に保存したいという強い願いで結ばれています。

旧朝香宮邸は昭和58年、東京都庭園美術館として開館、幻の館であった建物の美しさは広く知れわたるところとなりました。そして平成5年には「アール・デコ様式を正確に留め、昭和初期の東京における文化受容の様相を伺うことができる貴重な歴史的建造物」として、ようやく東京都の有形文化財に指定されたのです。現在ではこの建物を永く保存・活用するための修繕計画が立てられ、今回の修繕工事もその計画に基づき実施されます。

竣工から78年、中田氏に続く多くの人々の旧朝香宮邸保存への願いは今日の私たちに、そして次世代の人たちにもつながっていくことでしょう。（岡部）◆

図1

図4

図1.白金迎賓館時代の大客室 昭和36年頃

図2.白金迎賓館時代の外観 昭和36年頃

図3.白金迎賓館時代の大食堂 昭和36年頃

図4.白金プリンス迎賓館時代の正門　昭和56年頃

図1–3.
早稲田大学大学資料センター
堤康二郎関係文書より

*1.「白金迎賓館説明書」
早稲田大学大学資料センター
堤康二郎関係文書

❖コラム Column

昭和38年、朝香宮邸侍女室棟があった部分に白金迎賓館新館（設計、網戸武夫）が建設、主に披露宴などの宴会場として利用されました。美術館となってからは休憩ラウンジや講演会会場等として使用されましたが、平成20年にその役割を終え、このたびの工事で解体されることになりました。跡地には美術館別館の新築が計画されています。

東京都庭園美術館新館 平成22年